

古代ロシア語における動詞前綴の機能について¹

序言

§1 古代ロシア語の動詞組織を研究する者にとって常に問題となるものに動詞の前綴がある。これは一つにはスラヴ諸語において特に重要な、いわゆる「完了化」の働きをもっていることにもよるが、元來動詞は名詞、形容詞などに較べてその意義の外延が広く、加えてこれに関係する文法範疇の数も決して少くはないところから、前綴をも含めた語彙的意義を明らかにしないでは、具体的な考察に際してどこまでを語彙的意義、あるいは文法的意義に帰すものとすべきかが必しも明らかではなく、引いては所与の形式の文法的意義を抽象する作業にも少からぬ困難をもたらすと予想せられるからである。

体の問題に常につきまといている曖昧さも、体の本来的な性質に負うところが少なくないとはいえ、その幾分かはこの点の考慮の不十分さにその責をを帰すべきものと思わせられる。

もとより前綴は空間、時間、様態などの異質なものに関係し、またこれが限定する動詞(基幹動詞)の意義も決して等質なものではない。両者の関連の仕方にも極めて複雑なものがあり、たとえ同じ前綴であっても基幹動詞の語彙的意義その他の諸条件に従って、そこにはおのずからなる使用の相違が生じないわけにはいかない。これまで前綴に関してその種類を羅列するにとどまり、一定的方法的意識をもって統一的に扱おうとする試みがなされなかったのも、おそらくはこのようなところにその原因があったのではないかと想像される。

この小論の目的もこの問題の統一した方法的取扱いにはない。この問題の周辺をさぐることによって問題点の所在をさぐり、一貫した方法を見出すための手掛りを得ようとするものに外ならない。

資料としてはノヴゴロド原初年代記シノダリ本をもちいている²。またこの小論で扱っているのは、アオリスト3人称の単数及び複数の諸形に限られている。その理由はこれらの形の頻度が最も高いことにもよるが、アオリスト及び3人称という文法範疇がその文法的意義においていわば最も安定した、中立的な色彩が比較的濃いということによる。さきに述べたように動詞の意義の外延が広い事を考えれば、このような規制を行うことは必要なことと考えられる。

¹『古代ロシア研究』第8号 昭和42(1967)年7月 81-110頁。

²Новгородская первая летопись старшего и младшего изводов, АН СССР, М.-Л. 1950.

本 論

I. горѣти を基幹動詞とする語群

§2 さていま горѣти およびこれを基幹とする前綴動詞を考えてみる。シノダリ本にはこの種の動詞 горѣти のほか、загорѣтися, изгорѣти, погорѣти, пригорѣти, огорѣти, съгорѣти の六種が存在している。スレズネフスキーによれば загорѣтися は начать горѣти 「焼けはじめる」、пригорѣти は обгорѣти 「表面、端が焼ける」、обуглиться 「炭化する」、высохнуть 「乾く」、огорѣти は обгорѣти 「表面、端が焼ける」とあり、それぞれ горѣти の意義を前綴の意義が規定しているとみられるのに対し、изгорѣти, погорѣти, съгорѣти には前綴の相違にかかわらずすべて сгорѣть という訳語が与えられている。現代ロシア語では сгорѣть は горѣть に対応する完了体動詞と考えられているところからすれば、スレズネフスキーの訳語における前綴 с- は単なるアスペクトの指標にすぎないと思われる。即ちここでは из-, по-, съ- などの前綴の意義は無視せられ、горѣти の単なる完了体動詞と考えられていると思われるのである。

このような規定が果して妥当なものであるかどうかは、改めて検討されなければならないであろう。

さて以上の七種の動詞のうち、горѣти はアオリストのみを考察の対象とするという制限によって除外される。これはシノダリ本を通じて二例用いられているが、アオリストに現われることはない。また пригорѣти も「炭化する」の意味で一例用いられているに過ぎず、比較が困難であるため除外する。

(1) Томъ же лѣтъ стоя всѣ лѣто ведромъ и пригорѣ всѣ жито ... (32-2)

従ってここで考察するのは残りの五種の動詞である。

загорѣтися

§3 загорѣтися は горѣти を基幹とする前綴動詞の中で唯一つ再帰形をとるという特殊性を有している。горѣти は本来自動詞であることを考えれば、このような再帰形は意義の面からも極めて特殊なものと考えないわけにはいかない。

以上の点を除けばこれはスレズネフスキーの述べているような inchoativum として一応説明することができる。この動詞がしばしば отъ (~から) を含む句を伴うこと、および火事の記述に際してははじめにこの動詞が用いられ、ついで погорѣти あるいは съгорѣти による説明が加えられることの多いことは、このような観方を支持するものといえる。

例えば、

(2) Томъ же лѣтъ загорѣся пожаръ въ Славнѣ от Къснятина, и съгорѣста церкви 2; святого Михаила, а другая святыхъ Отець, и дворове

мнози по берегу, оли и до ручья. (44-7)

(3) Въ то же лѣто зогорѣся пожаръ от Деигуницъ, и съгорѣша церкви
3 ... (39'-9)

(4) Загорѣся от Матѣева двора от Вышковица, и погорѣ весь коньць
Славньскыи оли и до конца Хълма, мимо святого Илюю. (114'-5)

§4 しかしながら **загорѣтися** が「**на, въ + 所格**」あるいは単なる所格を伴う例が、「**отъ + 生格**」を伴うもの 5 例に対し 10 例にのぼることは注目に値する現象である。これらの句はいわば「動きを伴わない」場所を指示するものであるから、「始発」の意義とどうかかわるのかが問題となろう。これと同時にこの構文をとる場合 **загорѣтися** が常に無主本文として用いられていることは、著るしい現象として指摘の要がある。例えば、

(5) Загорѣся на Рядятинѣ улици и съгорѣ дворовъ 4000 и 300, а церкви
15. (77-5)

(6) ... нъ на другий день зогорѣся въ Чъглове улки, и погоре дворовъ съ
10. (54-4)

(7) Загорѣся Савъкине дворе на Ярьшевѣ улици, и бяше пожаръ зълъ,
съгорѣша церкви 10. (53'-9)

§5 前節に挙げた例文から見る限りでは **загорѣтися** が無主本文として用いられるのは、これが **-ся** による再帰形を有していたためとも考えられようが、何等の場所の修飾語をも伴わないときには常に主語を有することから、このような説明の根拠は失われる。例えば

(8) Априля 23. загорѣся церкы святого Михила въ сред Търгу, и много
бысть зла; и погорѣ весь Търгъ и двори до ручья ... (27-8)

(9) Мъстиславъ же и Костянтинъ и два Володимира съ пълкы поидоша
по Гюрги къ Володимирю; и пришъдъше, сташа подъ городомъ; и тои
ноци загорѣся городъ и княжь дворъ. (86-7)

(10) Того же лѣта безъ князя и без новгородцевъ загорѣся Ондръшковъ
дворъ въ Плотникѣхъ, и погорѣ и до Федора святого, и потом на тои
же недѣли погорѣ Ильина улица мало не вся и Лубяница, и церкы
святого Спаса и святого Лукы сгорѣ. (166-9)

- (11) Въ то же лѣто громъ бысть страшнѣ зло и мълнія; ... и шибѣ громъ и мълнія, и падоша вси людѣе, и церкви загорѣся ... и не бысть бѣды церкви а 2 человекѣ быста мъртва. (47'-8)

これらの例において(8)はノーヴィ・トルグの中心部にある聖ミハイル教会から火が出たことを記しているが、и много бысть зла「しかして大いなる災いがおこった」という表現があり、その説明として погорѣ があらわれている。

(9)はムスチスラフ等が城に迫って城下に陣を布いたその夜、城内に火の手があがったことを記している。

(10)はノヴゴロド公及びノヴゴロド人達が出征した留守に火事が起ったことを記している。

(11)は雷が激しく、落雷によって教会が火を發したが大事には至らなかったことを記している。

これらの文脈からすれば、загорѣтисяは「燃えはじめる」という論理的な始発の意義に重点があるというよりは、「思いがけなく燃える」という意識の強い場合に使用されたのではないかと考えられてくる。むしろ逆にこのような「思いがけなさ」という感覚の論理的表現として за の有する「始発」の意義が使用されているとみたいのである。もしもこのように「燃える」という現象が予期されるものでなかったとすれば、それは当然「燃える」というよりは「火を發する」というほどの意味であつたに違いない。いかなる人為も介在しないからである。загорѣтися のみが特に再帰形を必要とした根拠はこのやうなところに求められるべきではないであろうか。動きのない場所を示す修飾句を伴うことが多いのも、このように考えればよく説明できる。

場所を示す規定語のある時に無主本文になり、場所の規定のないときに主語をとる傾向があるのも、このような事情と表裏をなすものと考えられる。

огорѣти

§6 次に огорѣти についてみれば、次のやうな例が見出される。

- (12) Потомъ июля 16, в ночь, загорѣся на Ильинѣ улицѣ ... и погорѣ торгъ, и домове по Рогатицю, а церкви сгорѣ деревянныхъ 7 ... а каменныхъ 6 огорѣ, 7-я Варяжская. (157-8)

これは教会が焼けたことを叙したものであるが、ここで木造の教会に関しては сгорѣти を、石造の教会に関しては огорѣти をそれぞれ使用し、両者のあいだに使いわけがあることに注意しなければならない。同様に、

- (13) ... а въ Варяжской божици изгорѣ товаръ вѣсь варяжскыи бещисла; а церкви сгорѣ 15, а у каменныхъ върхы огорѣша и притворы.

(88-5)

ここでは「15の教会が焼け(сѣгорѣ)、また石造の(教会)ではドームが焼けた(огорѣша)」となっており、文脈からして木造の場合に сѣгорѣти が、石造の場合に огорѣти が用いられていることは明らかである。

これに対して文脈のみからは石造に関するものか木造に関するものか判断できないものもまた存在する。例えば

(14) ...и сгорѣ церковь святою Козмы и Демьяна, и другая святого Савы, и сорок четыре церкви огорѣ, и домове добрии (157-3)

この場合にも сгорѣти と огорѣти が対立して用いられているところから両者のあいだには何等かの差異が存在することは明らかと考えられる。他方 сѣгорѣти の用いられている聖コズマ・ダミアン教会および聖サヴァ教会について6689年(AD 1181)の項に次のような記事がみえる。

(14') ...Въ то же лѣто сѣрубѣша церковь святого Иякова на Добрыни улици, и святою безмезднику Къзмы и Дамияна, и святого Савы ... (44'-1~2)

石造の教会を建立するときに заложити を用い、木造の教会の場合には сѣрубѣти を使用する慣わしであるところから、この記事は聖コズマ・ダミアン教会および聖サヴァ教会が木造であったことを示すものといえる。(14')の例文は、6819年(AD1311)の項にあるが、この間に一度もこの教会についての記事がないことから、これが造りかえられたものではないと考えてもよいであろう。

以上述べたことを総合すれば、この場合にも сѣгорѣти が木造の教会に関して使用されていたことは、ほぼ確実と考えられる。この事と第一に挙げた条件、即ち сѣгорѣти と огорѣти とが対立して使用されているという事実、から огорѣти の用いられている40の教会はすべて石造であったと推定しても差支えあるまい。

この(14)例のように сѣгорѣти と огорѣти の対立的使用のみで、教会が石造であるか木造であるかを含意せしめる例の存在することは、この時期における動詞の使用が厳格であり、従ってまだ前綴の意義も明確であったことの証左であろう。

сгорѣти と погорѣти

§7 さて火事の記述において загорѣтися に引き続いて погорѣти あるいは сгорѣти による説明が行われることが最も多かったのは、既に述べたところである。このうち сѣгорѣти については、前節において考察したように、огорѣти に対して専ら木造の教会に関連して使用されているところから「すっかり」焼けるという сѣ- の意義が未だ充

分に明らかであったことが知られる。しかしこれがスレズネフスキーの述べているように погорѣти と全く同じであるかどうかについては、あらためて考察しなければならない。

両者を比較すれば、そのあいだに截然とした使用上の差異がみとめられる。погорѣти の場合 30 例中 21 例までが地名を主語にするかあるいは地名を含意しているのに対し、сѣгорѣти の場合には 33 例中 23 例が教会を主語としているのである。例えば

(15) Того же лѣта, веснѣ, погорѣ Нови торгъ. (152'-5)

(16) Въ то же лѣто мѣсяца априля въ 15 сѣгорѣ церкви от грома святого
Николы на Городици. (63-6)

(17) Того же лѣта, мѣсяца августа 28, загорѣся на Бояни улкѣ, и погорѣ
до половины Рогатици, а Славкова улица от Дмитрия святого и до
поля и церкви святого Климента сгорѣ. (164-12)

この通則に反して погорѣти が церкви を主語とする場合はわずかに一例に過ぎない。

(18) и погорѣша церкви и честныя иконы и книги и еуангелия. (127'-6)

これは Нѣмци に奪われたイズボルスクを奪回しようとしたプスコフ軍が敗れ、プスコフの中にある教会が焼けた事を誌したものである。

§8 погорѣти と сѣгорѣти を区別するもう一つの特徴は сѣгорѣти が人に関して用いられる場合が 7 例存在することである。

例えば、

(19) ...а въ Христовѣ церкви нѣколико головъ сгорѣ, и два поа сгорѣша: в Неревскомъ конци 10 церкви сгорѣ и многа узорочья въ церквах, и мужь добръ сгорѣ Елефѣрии Лазоревичь. (151'-3, 4, 5)

これに反し погорѣти が人に関して用いられるのは、次の 1 例のみである。

(20) (Исаковиць) ...грѣкомъ повеле пустити на корабле на не; тѣмъ же и не погорѣша фрязи. И тако бысть възятие Цесаряграда велико. (69'-8)

この фрязи「フリヤグ人達」は、具体的にはコンスタンチノーブルに来攻した軍船を指している。

§9 以上述べたことから сѣгорѣти は主として教会あるいは人に関して用いられ、погорѣти は場所に関して用いられることが明らかとなった。私はこれを対象に対する

価値の判断に起因するものと考えたい。さきに *огорѣти* との対比によって *съгорѣти* における前綴 *съ-* 「すっかり」の意義が当時未だ十分に鮮明であったと結論したが、いま *съгорѣти* と *погорѣти* の相違が対象に対する価値の判断にあるとするならば、これもまた前綴 *съ-* の働きに帰さしめられねばならない。してみれば *съ-* の有する「すっかり」という論理的な意義は、「結果の重大さ」という意識に支えられていたと解釈せねばならなくなる。少くともそう考えることによって上述の諸現象が統一的に把握されうるように思われるのである。

изгорѣти

§10 *изгорѣти* はシノダリ本には 2 例しか認められず、しかも同一の場所に使用されているところから、その機能についてはシノダリ本の内部で決定することはできない。スレズネフスキーの引用例などを参照する限りでは、少くとも論理的な意義は「一つ一つ余すところなく焼けた」というほどのものであったと思われる。

(21) а кто бяше въбеглъ въ каменья божнице съ товары, а ту **изгорѣша** и сами съ товары; а въ Варязьской божници **изгорѣ** товаръ вьсь варязьскыи бещисла. (88-3)

今述べたように *из-* の機能についてはよくわからないが、上例及びその他から想像すればこれは「量の大きさ」— この場合は「消失した量の大きさ」— の感覚を背景にしているのかもしれない。

以上みたように、シノダリ本においてはこの動詞に附加された前綴は未だ明確な意義を保存していたと考えられ、現代語にくらべてその含むところも遥かに大きかったと思われる。全体として副詞相当語の使用が極めて限られていたのも、あるいはこのことと関連があるのではないかと想像される。何れにせよ古代テクストを読む場合には周到な注意が必要とされよう。

II. *ити* を基幹動詞とする語群

§11 既に考察した *горѣти* を基幹動詞とする語群は、基幹動詞の有する語彙的意義のために行為の様態を示す前綴が附加されることが多かった。この故に *горѣти* の場合には前綴の附加を通じて言主の主観の投影が比較的容易に行われ得たとも考えられ、従ってこの結果を直ちに一般の前綴に準用することは、あるいは危険であるかもしれない。このために主観の投影が比較的行われにくいと思われる空間的意義を有する前綴をとるものについても、考察を行う必要が生ずる。*ити* を基幹動詞とする語群をとりあげたのは、ひとえにこの点の考慮によっている。

概 観

§12 まず「A地に入る」という現実の事態に対してどのような表現がみられるかを考察すれば、次のような諸例がみとめられる。

- (22) **Иде** боголюбивыи архиепископъ Нифонтъ въ Ладогу, и заложилъ церковь камяну святого Климента. (27'-2)
- (23) Въ то же лѣто **въниде** князь Рюрикъ Ростиславиць въ Новѣгородъ, мѣсяца октября въ 4, на святого Иерофея (37-9)
- (24) Томъ же лѣтѣ князь Ярославъ, преже сеи рати, **поиде** въ Пльсковъ съ посадникомъ Иванкомъ и тысячскыи Вячеславъ. (104-2)
- (25) **Приде** архиепископъ Митрофанъ, оправивъся богомъ и святого Софиею, въ Новгородъ марта въ 17. (93-1)

これらの例における *иде*, *въниде*, *поиде*, *приде* はいずれも「*въ* + 城市名の対格」から成る句を伴っており、城市に入るという事実関係には変りはない。

§13 同様に「A地から出る」という事実関係についてみれば次のような諸例を得る。

- (26) Томъ же лѣте **иде**, на зиму, Рюрикъ из Новагорода, и послаша новгородьци къ Ондрею по князь. (38-4)
- (27) **Поиде** князь великыи Юрьи из Новагорода, позванъ въ Орду от цесаря, марта 15, в субботу Лазореву, оставивъ в Новѣгородѣ брата своего Афанасья. (158'-12)
- (28) Томъ же лѣтѣ **выиде** Романъ ис Кыева Ростиславиць волею, и сѣде Михалко Гюргевиць Кыевѣ. (38-9)

これらの例においても *иде*, *поиде*, *выиде* はいずれも「*изъ* + 城市名の生格」から成る句を作っている。

§14 更に「A地から出てB地に入る」という事態の表現についてみれば、

- (29) И **иде** Гюрги из Володимирия въ Радиловъ Голодъчь. (86-10)
- (30) Томъ же лѣтѣ **иде** Романъ из Новагорода Смольняску. (42'-5)
- (31) В то же лѣто, той же зимы **выиде** князь Олександръ из Новагорода къ отцю в Переяславль съ матерью и с женою и со всѣмъ дворомъ своимъ ... (128-4)

- (32) **Въниде ис Кыева Даниль посадницить Новугороду.** (12'-4)
- (33) **Поиде князь Ярославъ изъ Новагорода Кыеву на столъ, поимя съ собою новгородци вятшихъ ...** (120-3)
- (34) **Приде архиепископъ Антони и с Перемышля въ Новгородъ и сѣде на своемъ столѣ, и ради быша новгородъци своему владыцѣ.** (101'-4)

§15 以上から明らかなようにたとえ現実における事実関係は全く同じであっても、場合によって異った動詞が使用されている。どの動詞を用いるかという選択の中は場合毎に異なるが、その選択は必しも前綴の意義の類似せるものに限定されているわけではない。(29)~(34)の諸例にみられるように、文脈によっては**въниде**と**выиде**、**поиде**と**приде**のような、全く相容れない意義を有するかにみえる動詞間にも選択の可能性が存在し得るのである。

このことはこれらの前綴動詞がいわば「客観的」に存在する行為を単に言語的に模写するのではなく、問題が一にかかって言主が現実をいかに「様式化」あるいは「言語化」するかにあることを示すものと考えられる。そこには既に強い主観の介在が予定せられているのである。

以上述べたことから考察はこのような選択にどのような条件が関与しているかに向けられねばならない。

ити と въ(н)ити

§16 **ити** が **въ** を含む句を伴う場合を挙げれば、

- (35) **Того же лѣта иде князь Всѣволодъ въ Смольнскъ своимъ орудиемъ.** (93-4)
- (36) **И послаша по Ярослава на всеи воли новгородѣстѣи; Ярославъ же въбързѣ приде въ Новъгородъ ... И сѣдѣвъ 2 недѣли, иде опять въ Переяславль, поя съ собою мужи новгородскыя молодежьшая ...** (112'-9)
- (37) **Того же лѣта князь Ярославъ Всеволодичъ позванъ цесаремъ татарскимъ Батыемъ, иде к нему въ Орду.** (130-5)
- (38) **Того же лѣта, на зиму, иде князь Ярославъ въ Володимиръ, и оттолѣ иде въ Орду, а в Новѣгородѣ остави Андрѣя Воротиславича.** (150-10~11)

(39) И иде владыка Давыдъ во Тфѣрь веснѣ, в роспутѣе, и доконча миръ.
(157'-9)

(35) はフセヴォロドが私用でスモレンスクへ赴いたこと、(36) はユリー・ドルゴルキーの孫ヤロスラフ・フセヴォロドヴィチがノヴゴロド公として招かれたにもかかわらず、二週間公位にあっただけでペレヤスラヴリに赴いたことを誌している。(37) はヤロスラフがタタールの汗抜都に呼ばれて本営 (Золотая орда, Golden Horde) に赴いたこと、また(38) は同じくノヴゴロド公ヤロスラフ・ヤロスラヴィチがヴラヂミリに行き、そこから汗の本営へ向かったこと、また(39) はトヴェリ大公小ミハイル・ヤロスラヴィチがノヴゴロドの補給線をおさえたことから、ノヴゴロド大主教ダヴィドが使者となってトヴェリに行ったことをそれぞれ叙している。

§17 複数形 *идоша* の場合例えば、

(40) Томъ же лѣтѣ *идоша* (с. новгородъци) въ Ладогу на воину. (7-3)

(41) Въ то же лѣто *идоша* из Новагорода въ Югру ратью съ воеводою Ядремь; (52'-4)

(42) И совкупися в Новѣгородъ вся волость Новгородская, плъсковичи, ладожане, Корѣла, Ижера, Вожане; и *идоша* в Голино от мала до велика, и стояша недѣлю на бродѣ ... (149'-12)

これらはいずれもノヴゴロド人(軍)あるいはその連合軍が戦いのため一定の場所に入ること示している。

§18 *въ(н)ити* の場合はこれに対して次のような例文がみいだされる。

(43) И *придоша* подъ Вышегородъ и начаша ся бити, и одолѣ Мьстиславъ съ братьею и съ новгородъци, и яша 2 князя: Ростислава Ярославича и Яропѣлка, брата его, вѣнука Олгова, а вышегородци поклонишася, отвориша врата, а Всеволодъ ис Кыева выбежа за Дънепръ: и *въиде* Мьстиславъ съ братьею и съ новгородъци въ Кыевъ, и поклонишася кыяне, и посадиша Кыевѣ Мьстислава Романовича, вѣнукъ Ростиславль. (80-2)

これはいわゆるオレグー門 *ольговичи* とモノマフー門 *мономаховичи* の抗争である。モノマフー門のムスチスラフ・ロマノヴィチがヴィシエゴロドにいたオレグー門のヤロ波尔クおよびロスチスラフ・ヤロスラヴィチを破ってこれを捕えたため、彼等の従弟フ

セヴォロド・スヴァトスラヴィチ・チェルムヌイは異民族の助けをかりて占領したキエフから逃亡した。そこでムスチスラフがキエフに入城し、キエフ大公となったという事件がここに記されているわけである。いうまでもなくオレグ一門の本拠はチェルニゴフであり、キエフは本来モノマフ一門のおさえるところであった。

- (44) Того же лѣта новгородъци, много гадавѣше, послаша по Ярославѣ по Всеволодици, по Гюргевѣ вѣнукъ ... и вѣиде князь Ярославъ въ Новѣгородъ, и усрѣте архиепископъ Антонъ съ новгородъци.

(80'-2)

これはモノマフ一門のヤロスラフ・フセヴォロドヴィチをノヴォゴロド公に迎えた記事である。ノヴォゴロドの地は本来はキエフ大公の長子が治めることになっていたが、これが崩れてもモノマフ一門がおさえる事には変りがなかった。

- (45) ... и съдумавѣше новѣгородъци показаша путь князю Роману, а сами послаша къ Ондрѣеви по миръ на всѣи воли своеи. Въ то же лѣто вѣиде князь Рюрикъ Ростиславиць въ Новѣгородъ, мѣсяця октябра въ 4, на святого Иерофея.

(37-9)

この年に起った物価騰貴の責を負ってロマン・ロスチスラフが退陣せしめられ、代りに兄弟リユリクが公として迎えられた。当時モノマフ一門の中にもモノマフの子ムスチスラフを祖とするものとユリー・ドルゴルキーを祖とする一派と二つの有力な派閥が存在していたが、ヴラヂミリ大公アンドレイは後者に属し、ロマン及びリユリクは前者に属している。ノヴォゴロド人がまずアンドレイ・ユリエヴィチに使者を送ったのはこの点の考慮によるものであろう。

- (46) Томъ же лѣтѣ иде Романъ из Новагорода Смольнску. Тѣгда же новгородъци послашася по брата его по Мьстислава въ Русь, и вѣиде Мьстиславъ въ Новѣгородъ ...

(42'-7)

ここではモノマフ一門ムスチスラフ系のロマン・ロスチスラフがノヴォゴロドを去ったため、兄弟のムスチスラフ・フラブルイを公として迎えた事を記述している。

§19 複数形の場合は少しくニュアンスがかわって「当然の結果あるいは成行きとして」という感じが強く出されている。

- (47) Тѣгда же цесарь избеже изъ града, и патриархъ и вси бояре; и внидоша въ градъ фрязи вси ... Заутра же, солнцю въсходящю, вѣнидоша въ святую Софию, и одьраша двѣри и расѣкоша ...

(70-1, 5)

- (48) И увѣдавъ цесарь, посла искать его; и начаша искати его въ мнозѣхъ мѣстѣхъ, и внидоша въ тѣ корабль, идеже башеть. (65-8)

これは普通の(即ち宗教ではない)事件の叙述であるにもかかわらず、(47)にみられるように絶対与格が使用されており、内容的にも東ローマ帝国の内紛を叙した一連の文章の中にみられるものであるから、これはビザンチン資料の翻訳の可能性が濃く、あるいはвънидошаはεἰσῆλθηνの機械的な訳語であるかもしれない。単数形の場合とニュアンスが異なるのも、この故かとも想像される。例文の(20)もこれと同じ箇所にも属するものである。

§20 以上述べたところから **ити** と **въ(н)ити** の相違は明らかであるように思われる。**ити въ** が本来あるべきではない場所に一時的に入るような時に使用されているのに対し、**въ(н)ити въ** はいわば入るべきところに入ったという場合に使用されていると考えられるのである。この点前綴 **въ** には何かラテン語の前綴 **re-** と似通った気分をもっているかにも考えられる。いずれにせよ **въ(н)ити въ** における前綴 **въ** は単なる tautology ではないとせねばなるまい。

прити

§21 **прити** の用例を観察すれば、特定の人物が来たったことを人々が喜んでいうように文脈にこれが用いられることが、きわめて多いことに気づく。例えば、

- (49) Новѣгородъци богомъ избранаго Митрофана въведоша въ епископью по Мартурии, и иде въ Русь ставитъся къ митрополиту съ новгородскими мужи съ всѣволожими, и поставленъ бысть мѣсяця июля въ 3 день, на святого Уакинфа; и приде въ Новѣгородъ септября въ 14 ... и ради быша новгородъци своему владыцѣ. (63-4)

- (50) Въ то же лѣто приде князь Костянтинъ Всеволодицъ, внукъ Гюргевъ, въ Новѣгородъ, мѣсяця марта въ 20, на святого Герасима: и радъ бысть всъ град своему хотѣнию. (72-9)

- (51) Приде же князь Святославъ въ Новѣгородъ, сынъ Всеволожь, вънукъ Гюргевъ ... и посадиша и на столѣ въ святѣи Софии, и обрадовася всъ Новѣгородъ. (62-1)

同様の例は 76-6; 87-1; 94-7; 94'-7; 101'-4; 108-1; 108-3; 128'-6 etc.

次例もこれに属するものと考えられよう。

- (52) Приде князь Михаилъ в Новѣгородъ, сынъ Всеволожь, внукъ Олговъ: и бысть льгъко по волости Новугороду. (101-5)

§22 前節に挙げた例から明らかなようにこのような場合は「въ + 地名の対格」を伴うものが大部分である。この構文はかなりはっきりした意図をあらわしていると思われ、特に喜んだというような表現を伴わなくとも、到来した人物に好意的立場をとっていると判断できる場合も多い。例えば、

(53) Приде архиепископъ Иоанн въ Новѣгородѣ мѣсяця декабрия въ 20. (7'-6)

(54) Том же лѣтѣ ходи Аркадѣ Кыеву ставитѣся епископомъ, ... и приде въ Новѣгородѣ, мѣсяця септября въ 13 день, на канонѣ святого Въздвигения. (30'-9)

(55) Приде князь Ярославъ въ Новѣгородѣ... Томъ же лѣтѣ приде цесарь грѣцкыи Алекса Мануиловиць въ Новѣгородѣ. (45-7, 46'-6)

同様の例は例えば、52'-3; 41'-6 etc.

§23 次の諸例も年代記者からみて喜ばしい事柄をあらわすものと考えられるが、これらは場所をあらわす与格を伴っている。

(56) Въ се же лѣто отвържеся архиепископъ Иоанн Новагорода, и поставиша архиепископа Нифонта, мужа свята и зѣло боящася бога; и приде Новугороду мѣсяця генваря в 1 день ... (13-8)

(57) Поставленъ бысть Илья архиепископъ новѣгородскыи от митрополита Иоанна, при князи русьстѣмъ Ростиславѣ ... и приде Новугороду мѣсяця мая въ 11 ... (33-5)

(58) Приде князь Романъ Мьстиславиць, вѣнукъ Изяславль, Новугороду на столѣ, мѣсяця априля въ 14 ... и ради быша новгородѣци своему хотению. (35'-3)

これに対し「прити + 与格」の構文に年代記からみて好ましいこととは考えられない場合に使用されることもある。例えば、

(59) Въ то же лѣто приде князь Мьстиславиць Всѣволодъ Пльскову, хотя сѣсти опять на столе своемъ Новѣгородѣ, позванъ отаи новгородскыи и пльсковьскыи мужи, приятели его. (18-8)

(60) Приде Гюрги князь и- Суждала Смольньску и зваше новгородѣце на Кыевъ на Всѣволодка, и не послушаша его. (20-8)

これほどはっきりしたものではないが、この構文をとるものには年代記者が否定的に対処していたと想像される間接的な資料が見出されるものが若干存在する。例えば

(61) Въ то же лѣто **приде Новугороду князь Святославъ Олговиць ис Цернигова, от брата Всеволодка.** (17'-3)

に対して同じ年の項に次のような記事がある。

(61') Въ то же лѣто оженися Святославъ Олговиць Новегородѣ, и вѣнчяся своими попы у святого Николы; а Нифонт его не вѣнчя, ни попомъ на сватбу ни церенцемъ дастъ ... (17'-9 ~ 18-2)

あるいはまた

(62) Тои же весне оженися князь Мъстиславъ Новегородѣ ... И потомъ позваша и ростовци къ собе, и иде Ростову съ дружиною своею, а сынъ остави въ Новегороѣ: и **приде Ростову.** (40-9)

に対して

(62') И възвратися Мъстиславъ въ Новѣгородъ, и не прияша его новгородци, нъ путь ему показаша съ Святославомъ. (40'-4~6)

(63) **Приде князь ис Церънигова Новугороду Яроплькъ Ярославичъ на вѣрбницу ...** (58'-5)

に対して

(63') ...и сѣдевѣшю ему от вѣрбнице до Сменова дни 6 мѣсяць одну, и выгнаша из Новагорода, и послаша опять по Ярослава. (58'-6~8)

§24 **прити** が何等の空間的な規定語を伴わない場合には、年代記者からみて好ましい事態と考えられるものと、好ましくない事態と考えられるものがある。

好ましい事態と考えられるものは例えば、

(64) **Приде Никифоръ, митрополить сурьскыи.** (7-1)

(65) А Мирославъ прѣставися до владыкы, гонуаря въ 28; а епископъ **приде феурря въ 4.** (61'-8)

(66) ...и **приде** на зиму Ярославъ по Крещении за недѣлю и седе на столѣ своемъ ...и добро все бысть: (59-1)

(67) ...а самъ **приде** сдравъ и дружина его. (131'-8)

好ましくない事態をあらわすのは例えば、

(68) **Приде** Всѣславъ и взя Новѣгородъ, съ женами и съ дѣтми; и колоколы съима у святыя Софие. (3'-11)

(69) На ту зиму **приде** рать татаьрская множество много, и взяша Тферь и Кашинъ и Новоторожъскую волость, и просто рещи всю землю Русскую положиша пусту ... (165-5)

§25 以上から **прити** には「到来」が好ましいことと考えられる場合と、逆に好ましくないと考えられる場合の二つがあったと考えられる。しかし好ましくないと考えられる場合は全体的にみて極めて限られている。

単数形において **приде въ** のように **въ** を含む場合大部分が「好ましい」事態の表現に用いられ、場所の与格を伴うか、あるいは全く場所の限定句をとらないものに、「好ましい」事態の表現と「好ましくない」事態の表現がたとえ少数であっても存在することは、「**въ** + 場所の対格」を伴う表現が他の二者に対していわゆる「有徴的」*merkmalhaltig* なものであることを示すものと考えられる。

ただしこの表現が「好ましくない」事態を表現する場合は特に複数において皆無だというわけではなく、限定句の種類が決定的な条件であるとは必しも言うことはできない。例えば、

(70) Въ то же лѣто **придоша въ Русь** пружи августа въ 28. (6-9)

(71) Того же лѣта **придоша** изъ заморія Свѣи в силѣ велицѣ в Неву ... (152'-10)

(72) Того же лѣта **придоша** Емь воевать въ Ладозьское озѣро в лодкахъ ... (103-5)

しかしこのような場合は極く少数であって大部分は **придоша съдорови** のような表現に用いられている。これはノヴゴロド人達が遠征から無事帰着したことをあらわしており、好ましい事態の表現と考えられる。この表現は必しも「**въ** + 地名の対格」の構文をとるとは限らないが、全体的にみれば、この場合にも上記の構文をとるものがやはり極めて多い。例えば、

(73) Князь же Олександръ съ новгородци и с ладожаны **придоша вси здрави въ своя си, скранени богомъ и святою Софьею и молитвами всѣхъ святыхъ.** (127-7)

(74) ...и придоша здорови вси въ Новъгородъ. (156⁷-8)

§26 このようにして **ити** の場合がいわば平坦な事実の叙述であるのに対し、**прити** の場合は互いに相反する二つの場合が存在するにせよ、そこに強い主観の介在がみとめられることは注目してよい。

このような主観の介在とは、具体的には「利害関係」の感覚ではないかと考えられる。この「利害関係」の感覚に基いて **прити** はある時には予想あるいは期待の表現となり、またあるときは心理的圧迫感の表白ともなると考えられるのである。

прити が「**въ** + 地名の対格」の句を伴うときに「好ましい」事態を表現する事が多いという事実は、基幹動詞のあらゆる意義が前綴のみならず、これを限定する前置詞の種類とも密接な関連を有することを示すものと思われるが、この場合「**въ** + 地名の対格」における前置詞 **въ** は **въ(н)ити** の項で考察した前綴 **въ-** の機能とよく似たものであったのではないかと想像される。前置詞 **въ** が前綴 **въ-** の機能と同じく「あるべきようになる」といった気分を表わしているとすれば、これが **прити** における、「利害関係」の感情に基く前綴 **при-** との相関において「好ましい」事態を表現することが多いのも、また当然のこととして説明することが可能となるからである。

выити と **изъити**

§27 **выити** の例は比較的少く、わずかに 13 例を数えるのみであるが、その使用は比較的明瞭であって二つの場合に限られる。

一つは文脈から「周囲の事情によって余儀なく出て行く」という場合に使用されるものである。

例えば、

(75) Томъ же лѣтъ **выиде** Романъ ис Кыева Ростиславиць волею, и сѣде Михалко Гюргевиць Кыевѣ. (38-9)

これはロマン・ロスチスラヴィチが「自己の意志で(волею)」キエフ大公の地位から去ったことになっているが、前年の 6679 年(AD1171)の項にヴラヂミル・モノマフの孫ヴラヂミル・ムスチスラヴィチ(即ちムスチスラフ系 viz. supra § 18 ex.45)がキエフで没した記事のあと、同じムスチスラフ系で、死んだヴラヂミルの甥にあたるリュリク・ロスチスラヴィチがノヴゴロドの代官ジロスラフを放逐したので、ジロスラフはスズダリのアンドレイ・ユリエヴィチ・ボゴリュブスキーの許へ身を寄せたことが述べられている。そののちリュリクがノヴゴロドを去ったので、ノヴゴロド人達はユリー系のアンドレイを公として迎えるために使者を送ったところ、公はさきに放逐されたジロスラフを代官として派遣し、翌年自からノヴゴロドに来た。このあと例にみえるようにムスチスラフ系

のロマンが「自由意志」でキエフ大公の座を去ったのであるが、このあとすぐにキエフ大公となったのはユリー系のミハイル・ユリエヴィチである。これらの事情からすれば、ここに記されているのはユリー系とムスチスラフ系の権力斗争なのであり、ロマンがキエフ大公の地位を捨てたのが彼の自由意志であったなどということは考えられない。

詳細な説明は避けるが次の諸例も同様である。

(76) Того же лѣта, на зиму, **выиде** архиепископъ Фектисть изъ владычня двора, своего дѣля нездоровия, благословивъ Новъгородъ, и иде в манастирь къ Благовѣщенію святыя богородица, изволивъ молчанное житие. (155-8)

(77) **Выидоша** намѣстници Михайловы из Новагорода, и поиде князь Михайло к Новугороду со всею Низовьскою землею. (160-5)

他の一つは何等かの事態の発生に対処するため出動する場合である。これは複数形に多い。

(78) ... а новгородци с княземъ Федоромъ поидоша на Волгу; и **выиде** князь Дмитрии Михайлович со Тѣбри и ста об ону сторону Волгы ... (158'-2)

(79) Поиде князь Мъстиславъ и Володимиръ ис Кыева къ Галицію на королевиця, и **выидоша** галициане противу ... (92-5)

(80) И пригониша сторожи Ярославли мало не до Городища, и **выидоша** всь град въ оружи от мала и до велика къ Городищю. (149'-2)

§28 以上の例文から **выйти** は「事態の行きがかり上やむを得ず出て行く」といった、いわば「外発的」な感情を背景にしているということが出来る。例が少いために明らかに出来ないが、**изйти** は少なくともこの点で **выйти** と区別されるように思われる。

例えば、

(81) ... нѣлзѣ бо бяше инако изити из града; тако **изиде** из Грѣчьскѣи земли. (65-7)

(82) Томъ же лѣтѣ, по грѣхомъ нашимъ, придоша языци незнаеми, ихъ же добрѣ никто же не вѣсть, кто суть и отколе **изидоша**, и что языкъ ихъ ... (95'-8)

- (83) Того же лѣта поиде князь Михаило изъ Орды в Русь, ведши с собою Татары, оканьнаго Таитемеря. Услышавше же новгородци съ княземъ Афанасьемъ, **изидоша** к Торжку и пребыша ту съ 6 недѣль, вѣсть переимающе. Тогда же поиде князь Михаило со всею Низовьскою землею и с Татары к Торжку; новгородци же съ княземъ Афанасьемъ и с новоторжци **изидоша** противу на поле. (159-5, 8)

上例の(81)はイサコヴィチがどうして追求を逃れてギリシアの地から脱出するかに苦心し、やっと脱出に成功するという記事であり、(82)ではタタールの来攻について、彼等がどこから出て来たかわからぬという表現に用いられている。また(83)ではタタールがルシに来たことを知ったノヴゴロド人が(ノヴゴロドはキプチャク汗国の支配下にはなかった)、これを妨害しようとしてノヴィ・トルグに出向き、伝令を捕えていたが、これに対してタタールがノヴゴロドに攻めて来るや、ノヴゴロド軍は進んでこれに立ち向かおうとすることが叙述されている。

このようにして **изити** はその行為が「内発的」なものであることを示す場合に使用されていると推定される。「内発性」と「外発性」、これが **выити** と **изити** を区別する主な徴条であると思われるのである。

ити と поити

§29 前綴 по- の語彙的意義については従来多くの研究者が考察の対象として来た。例えば Э. А. Галнайтите はリトアニア語の前綴 pa- と比較しつつ *verba movendi* に関してはこれに「行為が永続せず、時間的に限定されるか、または時として空間的に限定される場合、始発の意義を有する場合、行為の完了をあらわす場合」などがあることを挙げている³。Е. Н. Хлевникова-Прокопович もこの前綴が始発の意義を附与するとしているが、Е. А. Земская は по- の表わす始発の意義は за- の場合よりも具体的で、所与の場所から一定の方向への動きの開始をあらわすとする⁴。これに対し Antonín Dostál はこの前綴が行為を全体として把握する (*celkové pojetí*) ものであるとし、поити のアオリストに関しても、これが全体的把握に関わったものであることは明らかであるとする⁵。

このように諸家の見解がまちまちであることは、по- の意義が極めて曖昧なものであることを示していると思われる。シノダリ本においても поити の意義はその高い頻度にも

³ Лексические значения глагольной приставки по- соответствии с приставкой ра- литовского языка, *сб. Славянское языкознание*, АН СССР, М. 1959, pp. 48-58.

⁴ Е. Н. Хлевникова-Прокопович, Глагольное формобразование при помощи приставок в памятниках русской письменности второй половины XVII века, АН СССР Институт языкознания, *Доклады и сообщения*, X, М. 1956, p.138; Е. А. Земская, Типы одновидовых приставочных глаголов в современном русском языке, *Исследования по грамматике русского литературного языка. Сборник статей*, АН СССР, М. 1955, p. 12.

⁵ *Studie o vidovém systému v staroslověštině*, Praha 1954, pp. 262 & seq.

かかわらず、必しも明らかとはいえない。

§30 少なくともシノダリ本の資料から判断する限り例えば *поити* の *по-* が始発の意義を有するというを決定すべき決め手はないように考えられる。例えば、

(84) ...и приде Володимиръ Рюриковиць съ смольняны, **идоша** по Волзѣ, воююче. (84-5)

(85) ...И бы вѣсть у тѣхъ на Ярослава, и **поидоша** по Волзе, воююче. (84-10)

この二つの例を比較してみた場合、*поидоша* の前綴 *по-* の意義は「始発」とも、「～に沿って」とも、全体的に行為を把握するものともとれるが、これらはいわば主観的な印象であって、そこに客観的な基準があるわけではない。C. H. van Schooneveld が *иде* のようないわゆる「不完了体」動詞のアオリストを、行為の過程が単純でないことを表わしているとしているのも上例のような場合が存在していることから承服できない⁶。

§31 このような事情にも拘らず *поити* のアオリスト3人称の形が総計 97 例、*ити* が 108 例と両者の使用頻度がほぼ等しいことからみてこのあいだに何等の相違もなかったとする想定は、可能なものとは考えられない。

しかしここでは前綴 *по-* そのものの語彙的意義を決定することが主眼ではなく、なぜ年代記者が所与の現実をあるいは *ити* によって、あるいは *поити* によって様式化したか、が主たる関心事なのであるから、考察も専らこの点から進めることが必要である。

まず *иде*、*идоша* および *поиде*、*поидоша* の二つの語群についてこれを修飾する要素をみれば、前者につくもの延べ 118 例、後者につくもの延べ 88 例が記録された。*иде-идоша* は前綴を伴わずいわば無規定であるところから、修飾要素の附加されることが多いのも当然のことと考えられる。事実例えば *въ* を含む句を伴うものは *ити* 24 例に対し *поити* 11 例、*на* を含む句を伴うもの *ити* 41 例に対し *поити* 21 例のように、概ね *ити* を修飾する場合が多い。

この故に我々にとって興味のあるのはこのような一般的傾向に反して *поити* を修飾することの多い要素がどのような性質のものかという問題である。この条件に合致するものには *по* を含む句 (*ити* : *поити* = 1 : 7)、*къ* を含む句 (16 : 24)、*съ* + 生格の句 (2 : 6) などがある。以下これらを中心に考察を含めよう。

A. *по*

§32 *по* 含む句によって修飾されるものは (84)、(85) の例を除けばすべて「追跡する」、

⁶ A Semantic Analysis of the Old Russian Finite Preterite System, s-Gravenhage 1959, p. 21 etc.

「追求する」の意味に用いられる。

例えば、

(86) На ту же зиму придоша Емь на Водь ратью нѣ въ тысящи; и услышавъше новгородьци любо въ 500 съ Водью, **идоша по нихъ**, и не упустиша ни мужа. (26'-6)

(87) Тои же зимѣ придоша Литва ... торопцяне съ князьмъ своимъ Давыдомъ **поидоша по нихъ**, а новгородци послаша. (101'-10)

В. къ

§33 **къ** を含む句に関連して興味を惹くものに意義的にはこれとさほど異ってはいないと思われる、単なる与格による構文との関係がある。即ち **къ** を含む句を伴う場合には **поити** が用いられることが多い (viz. supra § 31. 16 : 24) のに対し、単なる与格を伴うものは **поити** 6 例に対し、**ити** 15 例と **ити** の方が遥かに多くなっているのである。

これらの構文の用法について調べれば、単なる与格が使用され得るのは地名の場合に限られているが、**къ** を含む句は地名にも人名にも用いられる。

また **къ** が地名を伴うものと人名を伴うものについてみれば、**ити** の場合はそれぞれ 8 例認められるのに反し、**поити** に関しては地名を伴うもの 21 例に対して人名を伴うものはわずかに 3 例を数えるのみである。**къ** が人名を伴う場合は、**къ** をとらない単なる与格による表示が不可能であったことを考慮すれば、特に意味があるとは考えられない。問題となるのは **къ** が地名を伴う場合である。何故ならこの場合には意義的には単なる与格をもって修飾することも可能であるから、上述したように「**къ** + 地名の与格」の構文が **поити** に多く用いられ (**ити** : **поити** = 8 : 21)、単なる与格によって動詞を修飾する構文に **ити** が多くあらわれる (**ити** : **поити** = 15 : 6) とすれば、「**къ** + 地名の与格」の構文が **поити** にあらわれやすい何等かの原因が存在していたと考えなければならない。

§34 次にこれらを内容的に検討すれば、**ити** が **къ** を含む句を伴うとき地名で敵対的に使用されるものは 9 例中 3 例、人名の場合は 7 例中 5 例であるのに対し、**поити** に関してはこの構文が地名で敵対的に使用されるものは 21 例中実に 19 例に及び、人名の場合にも 3 例中 2 例までが敵対的な文脈に用いられている。

これに対して単なる与格を伴うもので敵対的な文脈に用いられるものは **ити**、**поити** を通じて **ити** の 1 例にすぎない。このような分析から敵対性、非敵対性という意味論的徴条に関して **ити** が無徴的 *merkmallos*、**поити** が有徴的 *merkmalhaltig* であり、また「**къ** + 地名の与格」が有徴的であるのに対し単なる与格が無徴的であると考へてもよいであろう。

以上述べたことを表にすれば次のようになる(括弧内の数字は敵対的な文脈に使用されているものの数を示す)。

	与格	къ + 人名	къ + 地名
ИТИ	15(1)	9(3)	7(5)
ПОИТИ	6	3(2)	21(19)

与格の例、

(88) **Иде** Мьстиславъ **Кыеву** и сѣде Кыевѣ на столѣ. (31-6)

(89) **Поиде** Мьстиславъ **Кыеву**, оставивъ Новегородѣ княгыню и сына своего Василия. (87-4)

къ + 人名の例、

(90) **Идоша** людье съ посадникомъ и съ Михалкомъ **къ Всѣволоду**. (61-8)

(91) **И поидоша** новгородци полкомъ **к нимъ** из Новагорода, и они побѣгоша проче. (132'-10)

къ + 地名の例、

(92) ... и прия и больши немочь; и утаивъся женѣ и дѣтии и всѣи братьи, **иде къ святѣи Богородици** въ Аркажъ монастырь и пострижесе февраря въ 8 день. (93'-11)

(93) **И то слышавъ** Олександръ, отецъ Васильевъ, **поиде** ратью к Новгороду. (133'-2)

§35 以上の分析から中間的に次のような結論を導いても差支えないであろう。

1. 単なる与格は **ИТИ**, **ПОИТИ** を通じて地名にのみ用いられ、かつ 1 例を除いて非敵対的に使用されていることから、単なる方向を示すと考えられる。
2. **къ** を含む限定句が人および地名の何れにも使用されうるところから、前置詞 **къ** は目標を具体的かつ明確に指示する機能を有すると考えられる。
3. 「**къ** + 人名」の句が **ИТИ** に比較的多いことは人名の場合前項の **къ** の機能からして単なる与格のみによって方向を表示することができなかつたためと解されるが、この句が敵対的な文脈にも非敵対的な文脈にも使用され得ること、ならびに明確に人物に対する敵対的關係を表示する手段として「**на** + 人名の対格」の構文が存在

することを考慮すれば「敵対性」が *къ* の本来の意義によるものとは考えられない。但し *ити*, *поити* を通じて敵対的に使用される傾向が存在することは事実であり、この句が何等かの点で「敵対性」を惹起する誘因であったことは確かであろう。

4. 前項に述べたことからすれば、「敵対性」は前綴 *по-* の意義にも関わっていると考えられ、「*къ* + 地名」の限定句が大部分敵対的な文脈に使用されていることも、この考えを支持するものようではあるが、これと論理的意義において異るところのない、単なる与格による限定が、*по-* の存在にも拘わらず非敵対的に使用されるところからすれば、敵対性が *по-* と直線的に結びついていると断定することもできない。このことは *противу* が *идоша* と *поидоша* とともに用いられ得ることからも明らかである。

C. *съ* + 生格

§36 「分離」をあらわす「*съ* + 生格」を伴うものは *ити* 2 例に対し *поити* 6 例がみとめられる。これと関連して興味のあるのは同じく「分離」をあらわす *изъ* および *отъ* を含む構文との関係である。同じく「分離」をあらわすこれらの前置詞を含む限定句を伴うものが合計して *ити* 12 例、*поити* で 14 例と極めて少数でありしかも *ити* と *поити* のあいだにさほどの相違がみとめられないことは、*по-* の意義が「始発」を示すとする見解と必しも一致しないものがあるようにも思われる。

語彙的意義についても *изъ* が物の内部からの分離、*отъ* が表面からの分離を示すと考えられるのに対し、最も抽象的な *съ* が *поити* と共に用いられることの多いことも、この点に関して何か釈然としない。

D. 前綴 *по-* の機能

§37 以上述べたことから前綴 *по-* の機能として「行為の志向性」を考えてもよいのではないかと思われる。もしそうとするならば *къ* を含む限定句と共にあらわれる「敵対性」、あるいは *по-* を含む限定句と共にあらわされる「追求」の意義もこのような志向性の結果として説明することができる。またこれが「始発」あるいは「行為の全体的把握」といった意義乃至は感覚と結びつくことも容易に理解できるであろう。所与の行為が志向性を持つならば、それが志向性を持つに至った瞬間からその行為はそれ以前の状態乃至行為から区別されるだろうからであり、また他方志向性をもった行為はその志向性の故に言主の注意がそこに凝集されるに違いないからである。この意味での「始発」の意義は、その志向性の故に始発の地点に対して注意を向けることが少ないのもまた当然の理である。*поити* が比較的抽象度の高い意義を有する前置詞 *съ* と共に用いられるのもここからよく理解できるであろう。

例文の (84) と (85) もこのような観点からすればよく説明できるように思われる。この

2例は殆んど同じ文脈において *идоша* 及び *пойдоша* が用いられているものであるが、*идоша* を用いた(84)例は、ヤロスラフがどこに居るか不明のままヴォルガに沿って戦いつつ進む場面の記述であるが、(85)例は捕虜達の訊問によって目指すヤロスラフがノヴィ・トルグに居ることを知って更にヴォルガ沿いに軍を進めることを記述したものである。

(私見であるが、*по-* は本来はやはり「物に沿う」という空間的意義をもっていたのではないかと考えられる。一方ではこの空間的意義の弱化乃至は抽象化によって本来はそれを支えていた志向性の感覚が表面化し、それが現代語のいわゆる「始発」の意義に発展し、あるいは「行為の全体的把握」のような意義を経てあたかも独自の語彙的意義を失ってしまったかのようにみえることにもなり、また他方では本来の空間的意義から「少し」あるいは「しばらく」のような意義へと発達したのではないかとと思われるのである。少なくともそう考えることによって現代語における *по-* の意義を統一的に説明しうるのではないかと想像される。この問題はいわゆる *Grundbedeutung* に関するものであり、あらためて考察の要があろう。仮説として提示するにとどめたい。)

結 論

§38 以上述べて来たことから、一見単なる言語外的な事実の模写にすぎないかにみえる空間的な意義を有する前綴にも、その選択に対して強い主観の介在があり、それぞれの前綴の有する「論理的」な語彙的意義のうらには、常にそれを支え、動かしているところの、「感性的な」といってもよい意義乃至は価値がひそんでいるといってもよいのではないかと思考される。逆にこのように「論理化」されたものが実は何を意図したものであり、またそれが何を表現しうるかを考えようとしたのがこの小論の主旨であり、そのような「何かを表現する働き」を私はあえて「機能」と呼んだのである。

稿を終えるにあたってこのような考察の意味について一言触れておきたい。これには大まかに言って二つある。一つにはこのような方法によって当時の言語意識における個々の動詞のもつ、いわば「重み」といったものを比定し、年代記そのものの読み方、およびその内的な世界への接近のための手掛りが得られるのではないかと期待されることである。他の一つはこのような直接的なものではないが動詞の体との関連である。筆者はかねてより現代ロシア語の体を単なる完了・不完了といったアスペクトの差に解消することに疑問を感じているが、完了体動詞の現在形が未来的に使用されること、その他の理由から、完了体動詞は不完了体動詞に対してその表示する行為への強い主観の投入があること、また人称によってその使用に著るしい差異がみとめられることから、完了体動詞にあらわれる「主観」は主語のそれではなく、言主に属するものであるとする考えに傾いている。上述した前綴動詞にはこのような主観的な、いわゆる *connotation* が多少とも強く感じられるところから、このような *connotation* を媒介として前綴の完了化の働きが生ずるのではない

かと考えている。このような考え方からすれば行為が完了したか否かというアスペクトは、副次的な派生物ということになる。言主に余りかかわりないものとして傍観者の立場から行為を観察すればその行為は当然「流動的」なものと意識され、逆に強い注意の集中を伴った観察においては、その行為は一定の瞬間において言主の脳裏に定着せざるを得ないと考えられるからである。これは単なる仮説の域を出ないが、この考え方の当否は別として、今後の研究の方向をこのような考えの上に進めて行きたいと願っており、この意味で特に前綴を扱ってみようと思った次第である。御批判をいただければこの上ないしあわせである。(この小論の概要は泉井先生の御指示により昨秋の言語学会の席上、発表した。)